



第 152 号

—令和 6 年 12 月 20 日発行—

公益財団法人 古代学協会だより

再現 紫式部の旅 —船出の儀



大津市サンシャインビーチにて



(解説は、欄外、7 頁参照)

写真 中田 昭

「蘭陵王」に憧れて

—嫁して装束司を目指した私

黒田装束店
装束司

黒田知子



筆者近影

初めて装束というものに出会ったのは、中学生の頃でした。京都市美術館で目にした前田青邨の「蘭陵王」のぎよっとするような面の端から見てとれる、端正であろう顔の口元の美しさと朱色の装束の優雅な動きに魅了され、その翌日も訪れ、その絵の前に釘付けになりました。その頃は、雅楽や、装束というものはまだ絵の中でしか出会ってなかつたのですが、その優美であり、また唐様色の華やかさが、頭の芯に突き刺さるように入ってきたのです。

それから十年後に、主人と出会い着物には無い、帯の織りと違う初めて触れる織物、初めに偶然にも装束を調進（衣装を調べ作り納める）こと

こととなつたのです。一般的には、家業を手伝う事や、商家といふ環境に不安を覚えるかもしれません、実家が呉服卸商だった事、加えて和裁も洋裁も得意でしたので、何の抵抗もなく、逆に蘭陵王の雅楽装束に出会えるかも知れない、心密かに楽しみに胸躍らせていました。

当時、主人に蘭陵王の事は話しておりませんでしたが、ちらりと「雅楽装束はあるのですか？」と聞いてみましたが、「今ところは、ありませんね」との返答に、今はまだだけで、そのうち来るんだ！と勝手に解釈し、蘭陵王を胸のうちに温めることがとなりました。

かくして、装束店での修行は新婚旅行から戻った翌日から義母の横に付いて、「格衣」という袖なしの羽織のような形状のお装束の仕立て見習いから始まつたのを昨日のことのように覚えています。この日から装束という深淵に足を踏み入れることとなりました。



捻り仕立て

そのことに気がついたのは、その縫い方に慣れた頃で、「成程！」とピンときた時に、長い年月中、伝え、受け継がれてきた物事への敬意と畏敬の念を抱きました。長い年月に培われてきたものには必ず意味がある。

平安時代に華開いた装束達を、剖析（分解）し、組み立てる楽しさに夢中になりました。着物には、それほど多くの形状はありませんが、装束は男性のものでも袍（下巻）、袴（下袴）など、実に様々な形状、仕立て方があります。実際に漫る隙なく次から次へ断から仕立てまで覚えるのに気の遠くなるような時間と歳月を要しました。

装束の着付けのことを衣紋といいますが、衣紋することも装束司とい

い、偶然にめで持つ長く太い針、初の掬縫いという大きな針目で、一針ずつ掬うよう縫う。掬縫いとは、「一寸に三針」、一針約8ミリ程の縫い目となる。當時は『だいたいこんな感じ』という伝え方でしたから、意味もわからず見よう見まね。味もわからず飲み込む様に、義母の針目に合わせ慣れまるまで、とても時間がかかりました。その掬縫いですが、仮縫の様に粗く縫う。何故そうなのかは、強装束特有の織物にあります。織物は糊張されていて、細い針ではすぐに曲がります。また縫い目が細かくなると、縫い跡が波打つ原因となるのです。良く考えられたもので、丁度良いのが「一寸に三針」の掬縫いなのです。

そのことに気がついたのは、その縫い方に慣れた頃で、「成程！」とピンときた時に、長い年月中、伝え、受け継がれてきた物事への敬意と畏敬の念を抱きました。長い年月に培われてきたものには必ず意味がある環境だったかと、今も感謝しかありません。沸々と湧き上がる疑問を装束と対話しつつ、文献を紐解きながら、見本となるお装束を横に眺してゆく毎日は、大きな山を踏破していく感覚でした。

平安時代に華開いた装束達を、剖析（分解）し、組み立てる楽しさに夢中になりました。着物には、それほど多くの形状はありませんが、装束は男性のものでも袍（下巻）、袴（下袴）など、実に様々な形状、仕立て方があります。実際に漫る隙なく次から次へ断から仕立てまで覚えるのに気の遠くなるような時間と歳月を要しました。

あるのです。

十二単を例に取ると、そのパツツ一つ一つに「だからこの形、この仕立て」と腑におちる私なりの答えを見つけては、謎解きしている心持ちになります。そして、装束を知ることになり、見つけた時間で勉強できる環境がたくさんありました。生き立ちて」の面白さに目覚めていくことになります。

立て」と腑におちる私なりの答えを見つけては、謎解きしている心持ちになります。そして、装束を知ることになります。

立て」と腑におちる私なりの答えを見つけては、謎解きしている心持ちになります。そして、装束を知ることになります。



十二單

の取れた形に仕上げる為に寸法を一人で割り出し計算しきりません。上に重ねる程に、袖丈は長く、袖幅や襟寸法は短く計算する。代わりの織物はないので、裁断には一番神経を使います。必ず一晩寝かせ、翌朝、再度測り直して、「えいっ！」と気合を入れて裁断する。最初の鋸を入れるその一瞬の緊張感は、糸を生み出してくれた蚕、糸を紡いだ人、染め、織り、張り、その責任全てが鋸にかかるつくる。そう思うと、何度も体験しても慣れる事はありません。

ての大切な仕事の一つ。着物の着付けと違い、装束の数と同じく衣紋の方法もあり、人に合わせた寸法の装束では無く、一律の寸法で出来ているので、着る人に合わせて衣紋することはとても難しく、経験値がものを言います。その中で、自分で仕立てた装束を、その手で衣紋させてもらえる時ほど、幸せに感じる事はありません。子を成人させ、送り出す様な、感慨深いものがあります。なので雨に打たれた装束たちのその光景は、頭から離れず心から切なく悲しくなります。昨今、絹の扱いを知らない人がほんどのです。

十二単を学ぶ事は、最初、傷んだ裏を取り替えるところから学びました。糸を解く事は根気のいる作業ですが、解くことで、縫い手の息遣いや、技術が学べる生きた教科書なのです。

です。毎年新調がある訳では無いので、最初は袖からでした。なかなか一から作らせてもらえる訳もなく、仕間の作業を手伝い、見て覚えることが何年も続きました。装束の形状を理解し、ようやく一人で裁断から仕立ての工程に入れたときは、長いトンネルから抜け出した様に目の前がぱッと開けたように感じました。「裁断ができて『一人前』と師匠である叔母には言われました。洋裁なら型紙、着物なら寸法に沿って裁断しますが、装束の場合は、型紙も、きつちりとした寸法もありません。見本を踏襲することもありますが、大抵は文様の配置に応じて寸法を割り出し裁断します。十二単となると全体を調和の取れた形に仕上げる為に、全部の寸法を一人で割り出し計算しないといけません。上に重ねる程



板引きされた布

女子大学名誉教授 清水久美子先生
が「先代がされていた」と依頼され
たことに始まります。残念なこと
に、少しの資料は残っていたもの
の、十分なものではなく、途絶えた
ものを掘り起こす作業が、これほど
大変とは思いませんでした。新しい

「板引き」という技法も消えてしまった装束技法の一つです。同志社

仕立てには、織物の色に合わせた沢山の色の手縫糸が必要なのですが、近年、残念で心配なのが、微妙な色合いの色がなく、近い色を選ばざるを得ないことが多々あるようになります。特に、穴糸という太い絹糸は本当に色数が少なく、「この色はこれで最後」といわれると、無念さに苛まれ、お店の糸を買い占めたりします。道具や材料は、使いやすいものがシャボンの泡のように後から後から消えていく感覺です。今日あっても、明日ある保証はない。その刹那に、深い憂いを感じます。

課題にワクワクしたのは最初の数年。出来上がる工程をもう一度掘り起こすことは、気が遠くなる作業で、当時（平安時代）使われていたであろう材料は、先代の資料から読み解きつつ、手探りでの糊調合と施行技術の確立に至るまで、十年以上かかりました。毎日、板引きのことが頭から離れず、糊作りのために何ヵ月もお粥生活をしたり、糊調合のためキッチンは実験場と化しました。まだ完璧とは言えませんが、清水先生や主人と試行錯誤しながら一応の形となつた今、次の代に継承す

新しい装束と出会うたび、主人や義父母、叔父、叔母に教えて頂いた、その一つ一つが今では私の宝物となり、今でも頭の中で皆の声に励されます。こうして書き記していると、その時の様子が走馬灯のように流れ、有り難く、涙が溢れます。今まで頂いた技術を次の世代に渡すことが私の課題となりました。伝えることの難しさを感じつつも、少しざつ肩の荷を下ろさせてもらえる有難さを噛み締めるこの頃です。

でも、時々ふと思うのです。「蘭陵王の雅楽装束はいまだに来ない」。だからこそ、その日を楽しみに今も続けられているのかもしれま

父 米田雄介のこと

大阪工業大学教授

米田達郎



マドリード トレドにて 2008年

私に物心がついた頃にはすでに、自宅の書斎には研究書が山積みされていた。文字通り足の踏み場もなかつた。そのような部屋を我が家は勉強部屋と称し、我々子どもたちもそこで勉学に励んでいた。狭いにも関わらずである。学校の宿題やら定期試験、果てには受験勉強もその部屋で行い、少しでも手を抜いていられるのが分かると「集中しなさい」と

雷が落ちた。恐かったのだろう、いかに父の機嫌を損ねないかということに苦心をしていた。自分の課題をこなす傍らで、父の様子を覗うと、山積みされた資料の中からゴソゴソと本を取り出しては丁寧に研究ノートを作成していた。今からすれば書院や神戸女子大に勤務していたときも同様である。

長い研究者生活の中では誰しもが順風満帆というわけではない。父にもそのような時があつた「はず」である。父の仕事の進捗状況を私が知る指標は、書斎の外にまで漏れてくる煙草のにおいであった。眉間にしわを寄せ、蓄えていた資料を何度も見返しながら、仕事に黙々（モクモク？）と取り組んでいた姿が思い出される。このような状況であつても、日本史の事項を父に質問

の折りにそのことを話すと、母の話では相手をしているようなことを言つていたが、実際は静まりかえった家が寂しくもあつたのだと思う。私が実家近所に住居を移してからは、時々、実家に孫を連れて行つたが、かえつて騒がしくなり、それはそれなつてからではないかと思う。何かのことがちがつた迷惑であつたか。

父は仕事一辺倒のように見えるその一方で、休日には家族を連れて出かけることも多々あつた。東京国立博物館やサントリー美術館にはよく出掛けた。当時の私が美術品に興味を示すことはなかつたが、父の「とにかく見ておけ」という一言で連れられて行かれた。「視野を広げろ」という教えであろうが、小学生に対しても

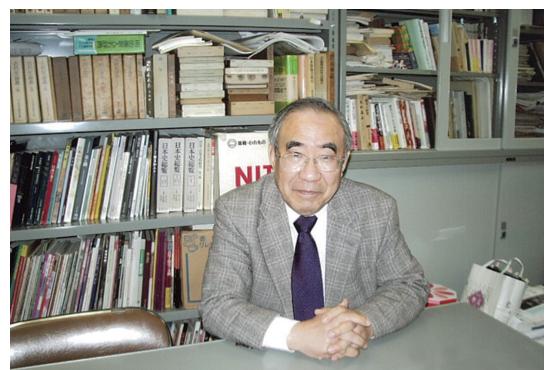
すると、丁寧に回答してくれた。子どもとの会話には、どれだけ父が忙しくとも、適当な対応をすることがなかつた。ただ、受験には不必要的ほどの詳細な説明で、違う意味で「沈黙は金なり」と思ったことがなかつた。いる（出題されたことがなかつた）。逆説的に捉えれば、自分で調べないと本を取れなかったか。とにかく父の機嫌を損ねないかというこに苦心をしていた。自分の課題をこなす傍らで、父の様子を覗うと、山積みされた資料の中からゴソゴソと本を取り出しては丁寧に研究ノートを作成していた。今からすれば書院や神戸女子大に勤務していたときも同様である。

書斎から出てリビングで仕事をするようになったのは、我々子どもが実家を出て、母と二人で暮らすようになったからではないかと思う。何かのことがちがつた迷惑であつたか。

父は実家近所に住居を移してからは、時々、実家に孫を連れて行つたが、かえつて騒がしくなり、それはそれなつてからではないかと思う。何かのことがちがつた迷惑であつたか。

もう少し丁寧な説明があるだろうと今更ながらに思い出す。父は好奇心旺盛、かつ周囲に目配りもしていた。このことは研究態度にも表れていた。古代史を専門としていたものの、その時代に拘ることなく、自己の研究に少しでも役に立つと思われるものを日頃からチェックし、それらを研究に活かしていたからである（正倉院に関わる事項中心ではあつたが）。

私が小学生の頃、毎年夏には旅行に連れて行つてもらつた。富山、日光、伊豆半島などが思い出される。静岡県が多かつた印象であるが、海水浴が目的でもあつたので分からぬでもない。関西で言えば、和



神戸女子大学 研究室にて 2008年



家族と共に 香川県金比羅宮にて

日本語学を専門とする、今の私の研究には、数十年経過してから役に立つた江川英龍の反射炉も見学している。当時はよく分からなかつたが、心が強かつたとはいへ、さすがに覚える気にはならなかつたと思われた。

好奇心の旺盛さは、海外にも向けていた。シルクロードに関するところが中心であつた。私はイタリアやフランスなどに同行

歌山や淡路島に行くような感覚である。ただ、父との旅行は海水浴だけで終わった記憶がない。必ず、その地域の史跡めぐりがあつた。伊豆半島では、源平の争いに関わる史跡などを中心に見て回つた。幸いなことに私は『平家物語』を読んでいたので（もちろん現代語訳）、いくつか見て回る内に、そのうち鎌倉にも行くのだろうなと感じ取っていた。しかし、ついぞ「いざ、鎌倉」とはならなかつた。時間がなかつたのか、はたまた別の理由なのか、よく分からぬ。特定の年代のものだけではなく、菲崎では西洋砲術を普及させた江川英龍の反射炉も見学している。当時はよく分からなかつたが、

いうものの、晩年に正倉院展に開催される講演を行ふ際、パワーポイント資料の大半を私に作らせていた。好奇心が強かつたとはいいえ、さすがに覚えていたようである。これらのことを端を追つていていたように思う。そうはいが、古代行政史以外にも興味を持ったから情報を得ていた。研究に活用できるモノに限らず、時代の最先端を追つていていたようだ。

私は厳しかつたが、孫たちに対してはやさしかつた。一般的に祖父母は孫に対して甘いと言うが、父も母は孫に対して甘いと言つた。この範疇に入る。私自身は祖父母との旅行はもとより出かけた記憶がほとんどないこともあって、自分の子たちには祖父母との思い出を作りたかった。私の考えを知つてか知らずか、孫たちとは頻繁に会話し、元気な時には旅行にも出掛けている。心身の負担を考えれば、決して楽なことではないが、孫たちの世話をし、その時間を大事にしていた。

二〇一二年八月二〇日、父米田雄介は享年八九歳で亡くなつた。数年前から入退院を繰り返していた。その仕事に対応していた。しかし特殊な治療薬の影響もあり、徐々に体力がなくなつていき、亡くなる一

立つている。父的好奇心の旺盛さに感謝である。

立つている。父的好奇心の旺盛さに感謝である。

ものだけでなく、史跡内にあるカビの状況にも注視していた。正倉院宝物の保存方法やその期間と関係があることはすぐにわかつた。またエジソンが売り出された当初、「今後はワープロだ」と言ってワープロを購入するが、パソコン（たぶんウインドウズ95）が世間で話題となつたときも早々に購入していた。携帯電話やタブレットも早くから手元に置き、それらから情報を得ていた。研究に活用できるモノに限らず、時代の最先端を追つていていたようだ。

ルクロードを経由した日本で、馬の尻尾の描かれる向きを、疑問に思つていたようである。これらのことを論文などにまとめたのか定かではないが、古代行政史以外にも興味を持ち、自分自身で視野を広げていた。

私は厳しかつたが、孫たちに対する態度はやさしかつた。一般的に祖父母は孫に対して甘いと言つた。この範疇に入る。私自身は祖父母との旅行はもとより出かけた記憶がほとんどないこともあって、自分の子孫には祖父母との思い出を作りたかった。私の考えを知つてか知らずか、孫たちとは頻繁に会話し、元気な時には旅行にも出掛けている。心身の負担を考えれば、決して楽なことではないが、孫たちの世話をし、その時間を大事にしていた。

正倉院所長を定年で退職してから、広島県立女子大学（現広島県立大学）、神戸女子大学に勤務している。その後、仏教美術協会会長、法華寺学術顧問、古代学協会理事・研究部長などでお世話になつた。定年退職後に再就職することが難しい時代である。そのような中、世間から必要とされていたことは、本人・家族にとってはありがたく、喜ばしいことでもあつた。また、父自身が周囲に気配りをしていたこともあつたと思うが、何よりも父は職場やそこでも体調を整えつつ、何かしらの仕事に対応していた。しかし特学協会には、年齢を重ねた後に着任したにも関わらず大変にお世話していただいた。ありがたいかぎりである。父が関わった方には時折、父のことを思い出していただければ、幸

ドラマ「光る君へ」に思う

同志社女子大学名誉教授

臚谷 壽



出版記念公開講演会にて
(京都府立京都学歴彩館)

りに言つたものである。そしたら後日、「先生、当たりましたね」と。これには笑つて遣り過ごすしかなかつた。

か?

道長の子を生むのではなないか? と冗談交じて

うか。ところが、あの放映以降は、母について知識を持ち合わせている人は少ない、というか歯牙にもかけていない人が大半ではなかろ

うか。

会う人の中には「紫式部の母つて

斬り殺されたのですね、知らなかつた……」という人も出てきた。これ

から、これが独り歩きすると式部に

は気の毒かと思う。ただ、史実かど

うかは証明できない。しかし、後に

道兼の息子の兼隆(藏人頭を経て中

乳母などの称あり)が結婚して一女

が生まれているという史実(赤染衛

門の『栄花物語』)を知ると、その

可能性はあり得ないという思いに傾く。

ささらに次の事実を知つてその思

いを強くした。それは兼隆が十一

歳で元服式を行つた時、もつとも

のである。返答に窮した挙句「こ

の調子でいくと、将来、紫式部は

冗談交じて

か? と

道長が勤めてい

ることであ

る。ちなみに

関白道兼はこ

の三ヵ月後に

疫病に罹つて

三十五歳で薨

去してい

る。

また、長保三

年(一〇〇一)

四十歳で崩御

した藤原詮子

(東三条院と

号し女院の初

例。円融天皇女御で一条天皇の母)

が鳥辺野で火葬にされ、その遺骨を

首に懸けて宇治木幡の藤原氏の墓地

まで行つたのが兼隆であることを知

る(藤原行成の日記の『權記』)。な

お『栄花物語』と『大鏡』では道長

がそれをしたことになつてゐるが、

これは史実ではない。先行の『栄花

物語』は、道長を何かと引き立てた

證子の思いに道長が応えた行為を形

に表すべく作爲したものと考えるべ

きであろう。

このように兼隆は父亡きあとは叔

父、道長の庇護下にあり、その意を

迎えることに努めた。道長が恩義を

強く感じ、尽くした姉の納骨の役を

兼隆に委ねたのは両者の強い信頼関

係を物語るものであろう。その兼隆

と式部の娘が結婚していることを考

えると「斬殺はあり得ない」と考え

る。でも、そこはドラマ。あの場面

を見た人は目が離せなくなつて見続

けているに違ひない。ひいては視聴

率アップにつながり、NHKの思う

壺である。史実に拘泥せずにドラマ

として十二分に楽しみ、古典の世界

へ分け入つてもらえれば何よりであ

り、書店には古典が多く並び閑心が

高まつてゐると聞く。「古典は心を

豊かにしてくれるもの」(「古典の

日」宣言)の名辞が生きてくる。ド

ラマのおかげで京都、滋賀、福井の

各県はドラマ館を開設したり、もと

よりあるスポットの宣伝に努める

として多くの観光客を呼びこんでい

る。

いくつかの県にまたがる大き

な催しとして国司下向列が実行

すること

の役を叔父にあたる道

長が勤めてい

ることであ

る。ちなみに

関白道兼はこ

の三ヵ月後に

疫病に罹つて

三十五歳で薨

去してい

る。

また、長保三

年(一〇〇一)

四十歳で崩御

した藤原詮子

(東三条院と

号し女院の初

例。円融天皇女御で一条天皇の母)

が鳥辺野で火葬にされ、その遺骨を

首に懸けて宇治木幡の藤原氏の墓地

まで行つたのが兼隆であることを知

る(藤原行成の日記の『權記』)。な

お『栄花物語』と『大鏡』では道長

がそれをしたことになつてゐるが、

これは史実ではない。先行の『栄花

物語』は、道長を何かと引き立てた

證子の思いに道長が応えた行為を形

に表すべく作爲したものと考えるべ

きであろう。

このように兼隆は父亡きあとは叔

父、道長の庇護下にあり、その意を

迎えることに努めた。道長が恩義を

強く感じ、尽くした姉の納骨の役を

兼隆に委ねたのは両者の強い信頼関

係を物語るものであろう。その兼隆

と式部の娘が結婚していることを考

えると「斬殺はあり得ない」と考え

る。でも、そこはドラマ。あの場面

を見た人は目が離せなくなつて見続

けているに違ひない。ひいては視聴

率アップにつながり、NHKの思う

壺である。史実に拘泥せずにドラマ

として十二分に楽しみ、古典の世界

へ分け入つてもらえれば何よりであ

り、書店には古典が多く並び閑心が

高まつてゐると聞く。「古典は心を

豊かにしてくれるもの」(「古典の

日」宣言)の名辞が生きてくる。ド

ラマのおかげで京都、滋賀、福井の

各県はドラマ館を開設したり、もと

よりあるスポットの宣伝に努める

として多くの観光客を呼びこんでい

る。

いくつかの県にまたがる大き

な催しとして国司下向列が実行

すること

の役を叔父にあたる道

長が勤めてい

ることであ

る。ちなみに

関白道兼はこ

の三ヵ月後に

疫病に罹つて

三十五歳で薨

去してい

る。

また、長保三

年(一〇〇一)

四十歳で崩御

した藤原詮子

(東三条院と

号し女院の初

例。円融天皇女御で一条天皇の母)

が鳥辺野で火葬にされ、その遺骨を

首に懸けて宇治木幡の藤原氏の墓地

まで行つたのが兼隆であることを知

る(藤原行成の日記の『權記』)。な

お『栄花物語』と『大鏡』では道長

がそれをしたことになつてゐるが、

これは史実ではない。先行の『栄花

物語』は、道長を何かと引き立てた

證子の思いに道長が応えた行為を形

に表すべく作爲したものと考えるべ

きであろう。

このように兼隆は父亡きあとは叔

父、道長の庇護下にあり、その意を

迎えることに努めた。道長が恩義を

強く感じ、尽くした姉の納骨の役を

兼隆に委ねたのは両者の強い信頼関

係を物語るものであろう。その兼隆

と式部の娘が結婚していることを考

えると「斬殺はあり得ない」と考え

る。でも、そこはドラマ。あの場面

を見た人は目が離せなくなつて見続

けているに違ひない。ひいては視聴

率アップにつながり、NHKの思う

壺である。史実に拘泥せずにドラマ

として十二分に楽しみ、古典の世界

へ分け入つてもらえれば何よりであ

り、書店には古典が多く並び閑心が

高まつてゐると聞く。「古典は心を

豊かにしてくれるもの」(「古典の

日」宣言)の名辞が生きてくる。ド

ラマのおかげで京都、滋賀、福井の

各県はドラマ館を開設したり、もと

よりあるスポットの宣伝に努める

として多くの観光客を呼びこんでい

る。

いくつかの県にまたがる大き

な催しとして国司下向列が実行

すること

の役を叔父にあたる道

長が勤めてい

ることであ

る。ちなみに

関白道兼はこ

の三ヵ月後に

疫病に罹つて

三十五歳で薨

去してい

る。

また、長保三

年(一〇〇一)

四十歳で崩御

した藤原詮子

(東三条院と

号し女院の初

例。円融天皇女御で一条天皇の母)

が鳥辺野で火葬にされ、その遺骨を

首に懸けて宇治木幡の藤原氏の墓地

まで行つたのが兼隆であることを知

る(藤原行成の日記の『權記』)。な

お『栄花物語』と『大鏡』では道長

がそれをしたことになつてゐるが、

これは史実ではない。先行の『栄花

物語』は、道長を何かと引き立てた

證子の思いに道長が応えた行為を形

に表すべく作爲したものと考えるべ

きであろう。

このように兼隆は父亡きあとは叔

父、道長の庇護下にあり、その意を

迎えることに努めた。道長が恩義を

強く感じ、尽くした姉の納骨の役を

兼隆に委ねたのは両者の強い信頼関

係を物語るものであろう。その兼隆

と式部の娘が結婚していることを考

えると「斬殺はあり得ない」と考え

る。でも、そこはドラマ。あの場面

を見た人は目が離せなくなつて見続

けているに違ひない。ひいては視聴

率アップにつながり、NHKの思う

壺である。史実に拘泥せずにドラマ

として十二分に楽しみ、古典の世界

へ分け入つてもらえれば何よりであ

り、書店には古典が多く並び閑心が

高まつてゐると聞く。「古典は心を

豊かにしてくれるもの」(「古典の

日」宣言)の名辞が生きてくる。ド

ラマのおかげで京都、滋賀、福井の

各県はドラマ館を開設したり、もと

よりあるスポットの宣伝に努める

として多くの観光客を呼びこんでい

る。

いくつかの県にまたがる大き

な催しとして国司下向列が実行

すること

の役を叔父にあたる道

長が勤めてい

ることであ

る。ちなみに

関白道兼はこ

の三ヵ月後に

疫病に罹つて

三十五歳で薨

去してい

る。

また、長保三

年(一〇〇一)

四十歳で崩御

した藤原詮子

(東三条院と

号し女院の初

例。円融天皇女御で一条天皇の母)

が鳥辺野で火葬にされ、その遺骨を

首に懸けて宇治木幡の藤原氏の墓地

まで行つたのが兼隆であることを知

る(藤原行成の日記の『權記』)。な

お『栄花物語』と『大鏡』では道長

がそれをしたことになつてゐるが、

これは史実ではない。先行の『栄花



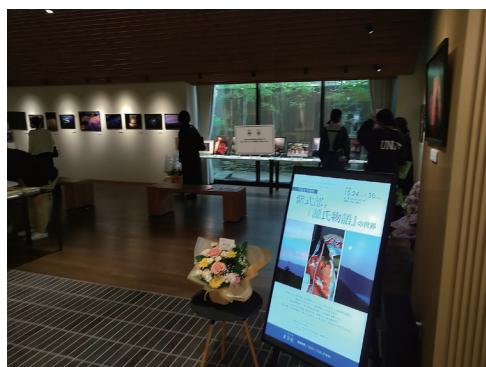
一条天皇皇后藤原定子二条宮跡顕彰碑
(中京区室町通二条下ル)

された。三十年近く前の平成八年（一九九六）紫式部が越前守となつた父、藤原為時について下向した時からちょうど千年。「越前武生来遊千年」と銘打つて武生市（現、越前市）では源氏物語アカデミー委員長の林和彦先生を実行委員長とし、十名近い監修委員による研究を経て国司下向列を実現したのである。平安時代には夥しい数の受領が京都と任國を往来したが、不思議なことにその資料は皆無といつてよい。ところが近年になつて平時範の日記（平安時代後期）が見つかり、因幡守となつた時範が任地へ下つていく具体的な様子や着任時に行うべき任務を熟（こな）していることを記した記録が出てきたのである。これによつて実現が叶つた。なお、本来なら「旅立の儀」を京都（平安京）からするべきであるが、市当局の対応が

鈍かつたので宇治にしたと漏れている。宇治上神社の拝殿（鎌倉時代、国宝）は寝殿を彷彿とさせるので藤原為時邸に見立ててピックタリである。一行は湖北の塩津浜での着岸の儀と無事を奉謝しての塩津神社での参拝、湯尾崎での境迎え（かつては深坂峠で挙行）をして武生へ向かい国府に見立てた總社大神宮前の特設舞台で「着任の儀」を執り行つた。なお、この行程は紫式部の歌集である『紫式部集』から辿れるもので琵琶湖は湖西を船で北上している。

今回もほぼこれに倣つて行われることになつており、新しく船出のシーンなどが加わる。実は昨十月十八日に宇治上神社での「旅立ちの儀」に始まり、石山寺に参拝、琵琶湖での「船出の儀」（表紙写真）を見学してきたのである。今ごろは敦賀の氣比神宮で「境迎の儀」を執り行つてゐるところかと思う。そのあと鹿蒜神社に参拝して国府（越前市）へ向かい、明日、「着任の儀」を執り行うことになつてゐる。私は、明日、武生（越前市）へ赴き「着任の儀」に参列することになつてゐる。

古代学協会では平安時代を研究の一つの柱にしており、その意味でも大河ドラマに便乗してさまざまに催しを企画し、実行している。その一つは、平安時代に大きな足



『史実でたどる紫式部』出版記念
中田昭「紫式部と『源氏物語』の世界」写真展
10月24日～30日 松栄堂薰習館 松吟ロビー

跡を残した人の邸宅跡を顕彰することであり、長年に亘り三十カ所に近い建碑を行つてきつて。なかでも廬山寺に設置の「紫式部邸」の顕彰は庭園空間を設けるなど大規模なものであつたが、他は説明版と碑の建立である。近年では、里内裏の初例となつた堀河殿（中京区四条通り御池東北の京都堀川音楽高等学校）、皇后藤原定子の二条宮（上京区二条通り室町西南）などがあり、この二年の中うちに摂関藤原兼家の東二条院邸跡も顕彰されることが決まつてゐる。

いっぽう書籍の刊行も行つた。「光る君へ」の報道を知つた時点で、紫式部を中心とし、文章は簡潔に、中田昭氏の写真を大きく取り込み、豪華にしてかつ安価なビジュアル本の

セッションが行われる。

さらには京都府の京都学・歴彩館との共催で「紫式部の生きた王朝社会」のテーマを掲げて七回におよぶ連続講座を歴彩館で開催中である。

十一世紀初頭に紫式部の手になる『源氏物語』が後世のさまざまな文化に及ぼした影響は計り知れない。日本人はこれを誇りとして学び、後世へと引き継いでいく義務があることを自覚せねばならない。その意味においても「光る君へ」の果たす役割は大きいに評価すべきである、と信じてゐる。（二〇二四年十月十九日記す）

（当協会理事長）

協会ニュース



◆ 富村文庫を金沢大学に寄贈
エジプト学者の富村傳先生（平安博物館非常勤講師）は角田文衛先生の最初期の門下生のおひとりであり、日本のエジプト学の開拓者でした。富村先生は平成十八年（二〇〇六）十一月十日に逝去されましたが、ご遺族から協会に、先生が収集されてきたエジプト学の貴重な研究書を約二五〇冊ご寄贈いただき、協会は「富村文庫」を設けて大切に保管してきました。

◆ 蘭谷理事長が「令和六年度地域文化功労者」として表彰
蘭谷理事長（同志社女子大学名誉教授）が「地域文化功労者」として表彰を受けました。同賞は「永年にわたり地域の文化振興に功績のあつた個人及び団体に対してその功績を讃えるため、道府県に推薦を依頼し、文化庁において選考を行い、決定された」賞であります。蘭谷理事長は、「永年にわたり日本古代史研究家としても公益財団法人古代学協会理事長等を務め、地域文化の振興に貢献している」として受賞致しました。

贈呈式 右：河合教授 左：山田理事

十一月二十日、京都府立府民ホールアルティにおいて、阿部俊子文部大臣より表彰状の授与が行われました。

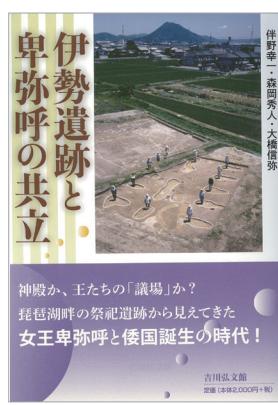
し、若い学徒の教育や日本のエジプト学の発展のために活用していただくことこそ、富村先生の御遺志に添うものであるという結論にいたりました。

八月九日、同研究所所長・河合望教授が協会にお越しください、贈呈式を行いました（写真）。大量の図書でしたので、河合教授と同大学の大学院生、さらには協会職員も一緒に汗を流しながらの荷造りとなりました。

出版だより



発行者 604-8131 京都府市中京区三条通高倉西入ル
〒602-8131 京都府宇治市宇治山田町四八
電話 075-252-3000
印 刷 発行日 令和六年十二月二十日
公益財団法人 古代学協会



安京を歩く楽しみも与えてくれる一冊となっています。

A5判、三四四頁、吉川弘文館、三三〇〇円（税込）。

◆ 梶川敏夫著『ビジュアル再現 地中に息づく都の榮華』
四十年以上にわたり京都市の文化財保護の仕事に携わられた著者は、文字通り遺跡の復元図を通して平安京を見る愉しさを与えてくれます。埋蔵文化財の行政指導が始まった当初から著者が関わってきた京都市内の各時代の遺跡の内、平安時代の平安京跡を中心としたものや関係したものに絞り、遺跡の復元図を交えて書いておられるとのことです。三十六年ほど前から個人的に作画された点数は百点以上。博物館や資料館の展示やポスター、街中に設置された説明板や現地説明会で配られる解説用レジュメやテレビ、マスコミの報道資料など、梶川先生のイラストを目にされた方は多いと思います。本書を片手に現代の平

土器の伝播と流通網、弥生時代の年代観などを解説。「魏志倭人伝」の記事から東アジア史とのつながりをも見通す（本書より引用）。

◆ 伴野幸一・森岡秀人・大橋信也著『伊勢遺跡と・卑弥呼の共立』
弥生時代後期、琵琶湖の南部に出現し、忽然と消えた伊勢遺跡。相次いで発見された大型建物跡は、女王卑弥呼の登場と倭国との統合へ向かう時期にいかなる役割を果たしたのか。祭祀や政治の場とされる特異な建物群の配置と構造、近江周辺の土器の伝播と流通網、弥生時代の年代観などを解説。「魏志倭人伝」の記事から東アジア史とのつながりをも見通す（本書より引用）。

A5判、一九二頁、吉川弘文館、二二二〇〇円（税込）